

# 動詞の自・他の対立に関する一考察(4完)

—— 意味的特徴の変化を中心として ——

高 嶋 稔

- I はじめに
- II 自動詞・他動詞の対立に関する問題点
- III 国語動詞の表記法に関する問題
- IV 動詞の語幹抽出に関する問題
- V 動詞の接尾辞
- VI 動詞の派生辞
- VII 動詞の自・他の派生構造と派生辞
- VIII 語とその意味の問題
- IX 意義素について
- X 自動詞・他動詞の意味的特徴
- XI 表現法のいわゆる「ゆれ」の問題
- XII 動詞の意味的特徴の変化(以上既に掲載)<sup>(1)</sup>

## XIII 派生形動詞の意味的特徴と派生辞

前記 VII<sup>(2)</sup>で、動詞の自・他の対立関係があると見做される語構造を分析し、自動化派生辞‘-Vr-’と他動化派生辞‘-Vs-, -er-’を抽出したが、ここで、これらの派生辞が動詞の語幹に附加して用いられる場合、意味的特徴の変化にどのような機能を果しているか、主として前記 X<sup>(3)</sup>で検討した〔自制的〕を中心に考察する。

まず、自動化派生辞‘-Vr-’の場合で、V が a, e, i, φ になる例を一つ

(1) I から IX までと X の一部は『人文研究』第 48 輯(小樽商科大学人文科学研究会, 1974 年 9 月) 49-67 頁. X の一部と XI 及び XII の一部は同誌第 50 輯(1975 年 10 月) 63-80 頁. XII の一部は同誌第 51 輯(1976 年 3 月) 54-71 頁.

(2) 前掲誌, 第 48 輯(1974 年 9 月) 57-62 頁.

(3) 前掲誌, 第 50 輯(1975 年 10 月) 65-66 頁.

ずつ挙げて検討する。

1.  $V \rightarrow a$  穴が塞がる。  
穴を塞ぐ。
2.  $V \rightarrow e$  包がほどける。  
包をほどく。
3.  $V \rightarrow i$  髪が伸びる。  
髪を伸ばす。
4.  $V \rightarrow \phi$  筋が通る。  
筋を通す。

これらの代表例の自動詞は、全て、主格として〔非情物〕をとって、〔-自制的〕の意味的特徴をもち、対立する他動詞は〔有情物〕の主語（表層で省略されている）をとって〔+自制的〕の特徴をもつ。1と2の他動詞は派生辞が附加されないで用いられる例で、これらの他動詞に‘-Vr-’が附加され、自動詞として用いられると〔+自制的〕から〔-自制的〕になる。3と4の例は、動詞の語幹に、自動詞は‘-Vr-’を、他動詞は‘-Vs-’を附加して、それぞれ〔-自制的〕、〔+自制的〕となっている。これら以外の用例を検討した結果も、大部分の派生形自動詞には同様な変化がみられるところから、自動化派生辞‘-Vr-’は、動詞の語幹が〔±自制的〕のどちらの特徴をもっているとしても、大部分は〔-自制的〕にする機能をもっていると考えられる。ただし、この〔-自制的〕に関しては、全ての自動詞に共通する特徴とするわけにいかない。主格が〔有情物〕の場合の自動詞、例えば、「歩く、走る」など、は〔+自制的〕の特徴を持つ。従って、自動化派生辞‘-Vr-’が動詞の語幹に附加されて〔-自制的〕となるのは主として主格が〔非情物〕の場合に限られることになるが、後で述べるように、自動詞を用いると〔動作・作用〕を客観的に表現する場合が多いので、主格が〔有情物〕でも「強盗がつかまる」のように〔-自制的〕の特徴をもつことがある。このよ

うに、意味的特徴については「あいまい」な面が見られるが、可能な限り分析を進めて、「あいまい」なところをどこまで解決できるか検討してみることにする。

つぎに、他動化派生辞‘-er-’と‘-Vs-’が動詞の語幹に附加されて用いられる場合であるが、既に示した多くの用例で明らかなように、主格が他のもの（目的格）を支配して作用を及ぼした結果、動作や作用がなされるため、大部分の他動詞は〔+自制的〕の特徴をもつ。これは「他動」という文字で表わされているように〔他へのはたらきかけ性〕という特徴からも当然予想されることである。しかし、〔+自制的〕、〔他へのはたらきかけ性〕は、全ての他動詞に共通する特徴ではない。例えば、「六価クロムは身体に有害なものを含む。」の「含む」は、他動詞であっても〔他へのはたらきかけ性〕は無く、単に〔存在〕を表わしているだけである。他動化派生辞‘-er-’が附加されて用いる他動詞の中で「子供を部屋に入れる。」の表現は、〔積極的に子供にはたらきかけて入れる〕という意味だけでなく、〔子供が入るままにしておく〕というように、二通りの意味を表わしている。また、「試験に難問がでて、学生を苦しめた。」の「苦しめる」は、教師が積極的に学生を苦しめようと意図してやったのか、そういうつもりは無いのに客観的結果として、そういうことになったのか、どちらにも解釈できる。これに類似した用法がみられる他動詞に「間違える」、「隔てる」、「はだける」などがある。つぎに、語幹に他動化派生辞‘-Vs-’が附加されて用いられても〔-自制的〕の特徴をもつ場合がある。例えば、「彼女はお金を余した。」、「子供が目をさました。」、「彼女はないて目をはらした。」、「子供がよだれを垂らす。」などと用いられると、「余す、はらす、さます、垂らす」は〔-自制的〕の意味的特徴をもつと考えられる。これらの用法は、意味の力点が行為者の動作や作用よりも、動作や作用そのものに置かれている場合が多く、語構成の面では他動詞のかたちをしていても、動詞そのもののもつ意味は、むしろ、

(4) 前掲誌、第50輯（1975年10月）68-80頁。及び同誌第51輯（1976年3月）54-70頁。

自動詞的といえるであろう。つまり、何かが〔動作主〕の影響を受けて、動作や作用がなされるが、中心主題が「何か」と、その「何か」の「動作や作用」になり、「行為者」は主題からはずれる表現となる。これは「動作や作用」を客観的にみる場合で、「行為者」の「動作や作用」よりは「何か」の「動作や作用」を中心にして表現される自動詞の用法に類似している、と考えてよいであろう。従って、日本語動詞の自・他の区別は、その表わす意味と密接な関係はあるけれども、厳密な意味的分類ではない、と考えられる。派生辞‘-Vr-, -Vs-, -er-’も、「一部の例外を除いて大部分は」という条件付きで‘-Vr-’は〔-自制的〕, ‘-Vs-, -er-’は〔+自制的〕の特徴をもつ、ということになる。残された問題として、上記の「一部の例外」の部分をどのように扱うかということがある。「例外」と片づけてしまわないで、何らかの理由、あるいは規則性などを見出せないか、などは今後の課題とする。

#### XIV 意義素と示差的特徴の概念

ある語の意味を知っている、ということは「どのような条件のもとで、ある語がその言語を母国語としている人達に受け入れられるようなかたちで使用されるか」ということが判っている場合である、と考えられる。つまり、ある語の用法を他の語の用法と区別するのに必要な特徴を知っていることが、ある語の意味を知っていることになる。この特徴が「示差的特徴 (Distinctive feature)」といわれている。それは、ある語の用法を他の語の用法と区別するという意味で、その言語の話者が習得していなければならないことである、といえるであろう。このような語の習得が充分できて、はじめて、「語の意味を知っている」ことになる。いいかえると、示差的特徴は、言語の話者がその言語を正しく使える為に心得ていなければならない特徴である。

ある語の意味的特徴が示差的特徴であるかどうか、を決定する基準として、つぎのような方法が考えられる。意味が概略類似していると思われる一連の語について、その類似性を一つの意味単位 (一つの意味的特徴、または

二つ以上の意味的特徴からなる構造体）として表わす。その意味単位に、ある別な意味的特徴を附加した場合に、もとの意味単位と附加した意味的特徴の全体を表わす別の語が存在すれば、附加した特徴は示差的特徴となるであろう。一般に、示差的特徴を捉えるには、ある語の用法が部分的に類似し、かつ部分的に相違している語をまとめ、互いに比較・対照していく方法をとる。

語の意味は社会的存在であるから、習慣などと同じく、意味自身を直接観察することはできない。しかし、ある語が具体的に用いられた場合における意味は、範囲は限られるが、観察可能であるか、少なくとも、想像することによって内省で可能であろう。意味の分析と記述は、そのような観察可能な事象からの推定によって行うことになるであろう<sup>(6)</sup>。

意義素については前記 X<sup>(6)</sup> で簡単にふれたが、その概念についてまとめると、まず、意義素は「音声形式・意味内容・外界の指示物」の三つに関係がある。ただし、一部の語、例えば、接続詞や助詞など、には外界の指示物はない。つぎに、意義素は場面や文脈とは独立して存在する、という考え方をとって、可能な限り構造的に語の意味を捉えようとする。一つの意義素を更に細かい意味的特徴の構造として捉えようとし、意義素同士も、多義語の場合は、一つの単語内でどのような構造をなすか、を明らかにしようとする。そして、意義素を構成している意味的特徴のあるものは用法によっては「抑圧」されるものである、という考え方を<sup>(7)</sup>する。

以下、具体的に「あがる」、「のぼる」、「あげる」を例に、これらの語の意味的特徴<sup>(8)</sup>を検討し、前述の意義素と示差的特徴の関係を考察する。まず、類

(5) 「示差的特徴」の概念については、池上嘉彦、『意味論』（大修館書店、1975年5月）81-94頁を参照。

(6) 前掲誌、第48輯（1974年9月）63-65頁。

(7) 「意義素」の概念については、国広哲弥氏の説に従う。国広哲弥、『意味の諸相』（三省堂、1975年11月）‘意義素論’、44-51頁を参照。「意義素」という概念は成層文法理論においても重要な役割を果しているが、小論で用いる「意義素」の概念と成層文法理論のそれとは内容が異なる。

(8) 「あがる」、「のぼる」の用例、及び意味的特徴については、柴田武他、『ことばの意味』（平凡社、1976年9月）14-23頁を参照。

義語と考えられる「あがる」と「のぼる」の意義素分析をした後に、「あがる」と「あげる」を比較・対照して、その示差的特徴を捉えるが、これらの語は、いわゆる、多義語に属すもので意味の分析・記述が最も困難な語とされている。例えば、「あがる」が担っている多くの意味を、どのように意味的特徴としてまとめるか、また、同形異義語と多義語を区別するとき、その基準をどうするか、など厄介な問題があり、どの問題も簡単に解釈できない多くの要因がある。ここでは一つの試案を示すにすぎない。

1. a. 階段をあがる。
- b. 階段をのぼる。

この用例では「あがる」と「のぼる」に共通している意味として、〔下から上へ空間を移動する〕ことが認められる。ところが、

2. a. 二階にあがる。
- b. \*二階にのぼる。

のように 1. a, b の「階段」を「二階」に、更に「を」を「に」にすると 2. b は用いられない。この b が可能なのはロープなどを使用する場合であろう。〔空間を上へ移動する〕という共通の意味があっても、何か違いが感じられる。つぎに、

3. a. 階段をあがって二階に行く。
- b. 階段をのぼって二階に行く。

と a, b 共に用いられるが、それぞれの意味をよく考えると、a は二階に到達することに重点がおかれ、b は階段の下から上へ移動することに焦点を合わせている場合に用いられることが判る。例えば「ゆっくりと」という語と共に用いると、つぎの a より b を用いるであろう。

4. a. 階段を<sup>○</sup>ゆ<sup>○</sup>っ<sup>○</sup>く<sup>○</sup>り<sup>○</sup>と<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>が<sup>○</sup>っ<sup>○</sup>て<sup>○</sup>二<sup>○</sup>階<sup>○</sup>に<sup>○</sup>行<sup>○</sup>く<sup>○</sup>。
- b. 階段を<sup>○</sup>ゆ<sup>○</sup>っ<sup>○</sup>く<sup>○</sup>り<sup>○</sup>と<sup>○</sup>の<sup>○</sup>ぼ<sup>○</sup>っ<sup>○</sup>て<sup>○</sup>二<sup>○</sup>階<sup>○</sup>に<sup>○</sup>行<sup>○</sup>く<sup>○</sup>。

つぎは、「あがる」と「のぼる」が同一の環境で用いられない場合の例である。

5. a. 花火があがる。  
b. \*花火がのぼる。
6. a. 旗があがる。  
b. \*旗がのぼる。
7. a. 座敷にあがる。  
b. \*座敷にのぼる。
8. a. \*山に歩いてあがる。  
b. 山に歩いてのぼる。
9. a. \*川をあがる。  
b. 川をのぼる。

これらの用例で、5から7までで a が用いられるのに b は用いられず、8と9では b が用いられて、a が用いられない理由を考えると、「あがる」は到達点に重点がおかれ、「のぼる」は、到達点よりは途中の経過あるいは経路に焦点を合わせて表現する語であることが判る。8. a が「ヘリコプター」という語と共に「山にヘリコプターであがる」と用いられるのは、途中経路より到達点に重点がおかれるからであろう。さらに、「階段をのぼって二階にあがる」と用いられるのも「あがる」と「のぼる」の焦点のおきどころが異なることを示している、と思われる。つぎに、慣用的用法を検討する。

10. a. 雨があがる。  
b. \*雨がのぼる。
11. a. 風采があがる。  
b. \*風采がのぼる。

12. a. 試験場であがる。  
b. \*試験場でのぼる。

慣用的用法であるから 10, 11, 12 の各 b が用いられないのは当然であろう。10 の a は、あることが終了することを表わしており、これに類する用法として「仕事があがる」、「ドイツ語の入門編があがる」などがある。11 の a は、立派になるということを表わしており、もとの状態から良い状態になること、あるいは、もとの状態を離れて良くなること、を表わしている。12 の a も、同様に、もとの状態から離れて、不断の自分でなくなることを表わしており、「あがる」の基本的意味が相当「抑圧」されて、抽象的、あるいは、比喩的に意味が転用された例である。

13. a. 娘が大学にあがる。  
b. \*娘が大学にのぼる。

14. a. 血圧があがった。  
b. \*血圧がのぼった。

13 の a は、大学という到達点に焦点を合わせた「移行」であるから「のぼる」の b は使わない。また、大学に入学する前後は、この場合、連続していない。これまで挙げた例にも共通することであるが、「あがる」の〔移動〕あるいは〔移行〕は〔非連続的〕である。これは〔到達点に焦点を合わせる〕ことから予想されることである。反対に〔連続的移動〕という特徴をもつのが「のぼる」である。

15. 煙がのぼる。  
16. 血が頭にのぼる。

14 の a では、血圧が高くなる途中経過は問題にせず、測ってみたら高くなっていたのに対し、15 は体の中を血が上昇していくので〔連続的移動〕とみることができるであろう。この特徴も「のぼる」の基本的意味から当然予



想されることである。

「のぼる」が、このように〔途中経路に焦点を合わせる〕〔連続的移動〕とか、「あがる」が〔到達点に焦点を合わせる〕〔非連続的移動〕という特徴を有するのは、大野晋氏のつぎの如き指摘と関係があると思われる。

もともと、「あがる」も「のぼる」も、低いところから高いところへ、下から上へ移って行くことを表現するに変わりはない。しかし、「のぼる」とは、あるところを経由して線条的に高くなっていくことをいう。だから、「煙が のぼる」、「太陽が のぼる」、「のぼり 列車」（中略）みな経由するところがあって、線条的に高くなって行く。ところが、「あがる」は、どこかを経由していくという、その経由を中心に考える言葉ではなく、むしろ、一足飛びに高くなり、その高くなった結果を重くみる言葉である。<sup>(9)</sup>

つぎに「のぼる」の場合で、これまで挙げた用例の1, 3, 4, 8, 9の各bと15, 16に共通している特徴をとりだすと、それは〔自分で動き得るものの全体的な移動〕ということである。ただし、〔自分で動き得るもの〕といっても、これは相対的概念で「煙」や「血」が自らの力で動くわけではない。現実の現象を客観的にみて言語で表現すると「煙」などがあたかも自分で動くかのようになるわけである。ここでいう〔自分で動き得るもの〕もこのような意味である。現実の物理的世界と言語の世界は、上述の如く、論理的に合わないことが多い。「あがる」にこのような制限は無い。

ここで試案的に「あがる」と「のぼる」の意味的特徴をまとめると、つぎのようになるであろう。

「あがる」＝〔移動（移行）（基点からの離脱）〕〔空間的（比喩的）上〕〔到達点に焦点〕〔非連続的〕〔完了〕〔顕在化〕

「のぼる」＝〔移動〕〔空間的上〕〔経路に焦点〕〔可動物の全体的〕〔顕在化〕

(9) 大野晋、『日本語の年輪』（新潮社、昭和41年5月）143頁。

説明を要するのは、〔顕在化〕という特徴が「あがる」と「のぼる」の相方に認められることである。これは、「あがる」と「のぼる」の特徴である〔移動〕の結果が明瞭に感知し得るので加えたものである。また、「あがる」に〔可動物の全体的〕という特徴を入れなかったのは「数人の手があがった」のように部分的に〔移動〕する場合があるので特に〔全体的〕は必要としないからである。〔移動（移行）（基点からの離脱）〕は「大学にあがる」の場合のように〔移動〕ではなく〔移行〕とした方がより正確と考えたからで、この場合は〔移動〕〔基点からの離脱〕は「抑圧」されたとする。さらに〔移動〕の方向が〔空間的上〕と〔比喩的上〕としたのは「月給があがる」などのように、主として慣用的用法にみられる特徴で、この場合も〔空間的〕が「抑圧」されたと考える。しかし、「比喩的転用」でこの問題を処理するのであれば特に（ ）に入れる必要はないかもしれないし、〔空間的上〕が「抑圧」と「部分転用」で、「抽象的に上の方向」、あるいは「良い状態」と説明できるのであれば、冗長になる、とも思われる。このように、「あがる」、「のぼる」の担っている意味が明示的な意味的特徴に分割し得るものではない。はっきりしている特徴を抽出しても、後に何か不分明な部分を残しているのではないか、という不安が残る。ここでは、前述のように、一応の試案的な意味的特徴を抽出して、「あがる」と「のぼる」の意味をまとめたにすぎない。

もし、仮に、前述の意味記述で、「あがる」と「のぼる」の全ての用例の大部分を説明できるとしたら、〔 〕で示してある意味的特徴の総和が意義素となるであろう。さらに、もし、「あがる」と「のぼる」を誤りなく使い分ける際に、我々が知っていなければならないことは何か、と問われると、それは「あがる」と「のぼる」の意義素で、共通していない意味的特徴を知っている、ということになる。これを示差的特徴としてよいと考えられる。実際には、意味的特徴を余すところなく抽出するとその数が多く、通時的な増減が容易であり、常に流動しているため、意義素の構造を正確に捉えることや、何を示差的特徴とするか、は極めて困難である。もし、意義素の構造

をできる限り正確に記述しようとするならば、文法的特徴と文体的特徴を意味的特徴に加えて、これら三つを総合的に分析し、記述しなければならないであろう。

ここで、少し、それるが、意味の分析と漢字の関係についてふれると、「あがる」は「上、挙、騰、揚」が用法によって使い分けられる場合がある。これは、「あがる」が多義語であるため、その表わす意味によって使い分けられる、とも考えられる。しかし、一方では、「当て字」という習慣があり、必ずしも漢字のみが明示的に意味を表わしている、といいきれない。漢字が持っている意味構造や漢字という言語記号で表わされる現実の把握の仕方などは、原則として、一字一字解いて教わることが学習行為の一部にある。更に、漢字が二つ以上結合して使用される場合は、それぞれ一つの漢字の意味がある程度判っていれば全体の概略の意味を予想できることがあるにもかかわらず、一方で「当て字」の習慣や漢字制限などで、前述したように、「鎖す」と書くべきところを「鎖」が使えないため「閉す」と書いて意味を把握するのに困難なことがある。そのほか、意味を正確に理解するという立場から、現在の漢字の使用法にはかなり矛盾する点が多くみられる。漢字の使用法、これと関連する漢字制限などは、もっと真剣に取り組む必要があるだろう。もし、「あがる」の表わす意味によって正確に「上、挙、騰、揚」を使い分けられているのであれば、その意味分析は、それだけ容易になるであろう。しかし、これらの漢字の使用は一般に認めらるまでに定着していない。「上る」を「のぼる」の「当て字」とする場合さえある。この問題を論ずるには稿を改めなければならない。

本論にもどって、「あがる」、「のぼる」は共に自動詞である。これらに対立する他動詞として「あがる」には、既に述べたように、他動化派生辞 '-er-' を附加して形成される「あげる」がある。しかし、「のぼる」には対立する他動詞は見当たらない。<sup>(10)</sup> 他動化派生辞 '-Vs-' を附加して「のぼらす」と使

(10) 古語では「のぼる」に対立する他動詞として「のぼす」が用いられていたが現在では廃語になっている。

えそうであるが、一般には使役形の「のぼらせる」が用いられている。もし、「あがる」と「のぼる」を扱ったように、「あがる」と「のぼる」のそれぞれの対立する他動詞を検討できればよいのだが、「のぼる」の他動詞形が無い以上、先に検討した「あがる」の意味的特徴を「あげる」と比較・対照する。

前記<sup>(11)</sup>Ⅺで、「あがる」と「あげる」の用例として、それぞれ、1から27まで、及び1'から27'まで挙げて検討し、概略、他動詞を中心に、用例全体に共通する特徴を〔動作・作用〕+〔はたらきかけ性〕→〔動作・作用〕+〔結果〕とまとめた。問題となるのは、「あげる」の意義素から〔はたらきかけ性〕を除いた〔動作・作用〕の内容と、「あがる」の意義素から〔結果〕を除いた〔動作・作用〕の内容が同じかどうか、ということである。前記の「あがる」の用例7から27までと、「あげる」の用例7'から27'までに関する限り、〔動作・作用〕の内容については一見問題がなさそうである。動詞の自・他の対立という小論の範囲からそれるが、「あがる」と「あげる」の意味分析で問題になるのは、「あげる」が用いられる文の目的格を、そのまま主格にして「あがる」が用いられない場合である。例えば、前記の1'から3'までのほか、つぎの用例が挙げられる。

お金をあげる。

都会へでて一旗あげる。

彼女にねつをあげる。

仕事に全力をあげる。

これらの例はいずれも慣用的な用法で「あげる」の基本的な意味からずれているが、「お金をあげる」の場合は「燈明をあげる」、「お経をあげる」などと同様敬語的で、うやまう相手を高いところにたとえることからでたものとも考えられる。このように、慣用的に用いられる「あげる」を同形異義語とするか、同一単語の多義的意味とするか、が大きな問題となる。国広哲弥氏

(11) 前掲誌、第50輯(1975年10月)69-72頁。

は、多義語と同形異義語を区別するための基準として、つぎの四つを挙げている。

- (1) 転移・転用関係にある場合は多義語である。
- (2) 転移・転用関係にない場合は、共通の語義的意味特徴がなければ同形異義語である。
- (3) 転移・転用関係にない場合、異なった意味分野 (semantic field) に属するものは同形意義語である。
- (4) 共通の語義的意味特徴があっても、異なった形式類 (form-class) に属するものは同形異義語である。<sup>(12)</sup>

この基準だけで問題が解決できない点がある。国広氏も「なお、不明な点があるので今後の考察にまちたい。」と述べているように、更に、厳密な検討が必要である。ここでは、慣用的用法のうち、明示的に理由を挙げることはできないが、上記の基準にてらして同形異義語と考えられる用例を除いて「あがる」と「あげる」の意味的特徴を「あげる」を中心に検討する。用例は、前記<sup>(13)</sup>Ⅺで挙げたものを用いる（数字ももとのまま）。

7. 花火があがる。
- 7'. 花火をあげる。
8. 足があがる。
- 8'. 足をあげる。
9. 旗があがる。
- 9'. 旗をあげる。

この三組の用例は、それぞれ、「あがる」と「あげる」の基本的意味で用いられていて、他動詞の場合は、新たに〔動作主〕が加わり（表層では省略

(12) 国広哲弥, 『意味の諸相』(三省堂, 1975年11月) 82頁.

(13) 前掲誌, 第50輯(1975年10月) 69-72頁.

されている), 自動詞の「主格」が動作を受ける「目的格」となる。これは他動詞のもつ特徴〔はたらきかけ性〕から当然予想されることである。前述の「あがる」の意味的特徴が「あげる」から〔はたらきかけ性〕を除いた場合に当てはまるかどうか、確かめてみる。まず、〔移動〕〔空間的上〕は問題がない。〔移行〕, 〔基点からの離脱〕, 〔完了〕は「あがる」の、主として、慣用的用法にみられる特徴であるから、この場合は問題にならない。〔到達点に焦点〕はどうであろうか。「あげる」は〔到達点〕より、むしろ、〔移動〕そのものに焦点を合わせているように感じられる。しかし、「のぼる」の特徴の一つである〔経路〕に焦点を合わせているわけではない。やはり、〔到達点に焦点〕という特徴を「あげる」は担っている、とすることができるが、「あがる」に比べて、やや、うすれているとみるべきかもしれない。つぎの〔非連続的〕も〔移動〕の途中経過や経路には関係がないところから「あげる」の特徴として認められる。最後の〔顕在化〕も「あがる」と同様その〔移動〕は感知し得るとも考えられるが、どちらかというところから「あげる」には〔結果〕については明瞭でない。結果として、少なくとも基本的意味で「あがる」, 「あげる」が用いられた場合は、その意味的特徴に、特徴毎に示す内容に程度の差はあるにしても、大きな差はみられない。つぎに慣用的用法を確かめてみる。

10. 物価があがる。

10'. 物価をあげる。

この用例では「あがる」の特徴〔空間的〕が「抑圧」され、「上」が抽象化して、〔比喩的〕がうかびあがった例である。他の意味的特徴については前記と同様問題はないであろう。既に用例を挙げた11から27までの「あがる」と11'から27'の「あげる」<sup>(14)</sup>の場合も慣用的用法で、「あがる」の意味的特徴のあるものが「転移」, 「比喩的転用」, 「部分転用」などで説明可能である。

(14) 前掲誌, 第50輯(1975年10月)70-72頁。

本来ならば前記<sup>(15)</sup>の用例を全て一つ一つこのように意味的特徴を抽出して検討すべきであるが、それには紙数が足り無い。稿を改めて、更に別な、例えば、統語論からのアプローチや、格文法理論、あるいは、意味記述では比較的進んでいるといわれている成層文法理論の枠組みで、検討を試みると、今まで困難とされていた多くの問題点が解決されるかもしれない。動詞の自・他の対立に関しては残された問題が多い。特に意味の分析と記述に関しては未解決のままにした部分が多い。今後の考察にまちたい。

## XV む す び

これまで検討した結果によってまとめられることは、以下の如くなるであろう。

1. 日本語において、同一語幹から派生して形成されていると見做される動詞には、その語構成の面からみると、形式上対立していると思われるものがみられ、動詞の自・他の対立は、数種の派生辞を附加することによって形成される。(自動化派生辞 '-Vr-' 他動化派生辞 '-Vs-, -er-')
2. 意味的特徴の変化の面からみると、語構成上は対立している、と思われる自動詞・他動詞においても、厳密な意味での対立がみられないものがある。つまり、派生辞を附加して用いられる自動詞あるいは他動詞の意味が、その派生辞のもつ意味的特徴の他に新たな意味が加えられて用いられる動詞が存在する。従って、語構成の面で対立関係があっても、意味的特徴を含めると、真に対立が認められない動詞がある。これは「対立」という概念を、自動詞・他動詞に必然的に関係する特徴の違いを除いては、他の全ての意味的特徴を共有する、とした場合にいえることである。
3. 意味の記述は未開拓の分野が多く、「意義素」を例にあげても、その

(15) 前掲誌、第50輯(1975年10月)73-80頁。及び、同誌、第51輯(1976年3月)54-70頁。

数は多く、通時的な増減が容易であり、常に流動している語の用法と関連しているため、その構造を、合体として、明示的に捉えることは困難である。しかし、部分的には、小論で考察したように、かなり明瞭に意義素の構造を見出すことができる。